

身近なまちの風景物語(6)

つながりの出番

まちを歩いて道路に面した大きなガラス窓があると、その中に目が向く。住宅だと横目でちらっと見るだけ。店舗だと内装や客の様子を見て、「ふ〜ん」と通り過ぎる。ただ意外なものを目にすると、「おっ」と足を留める。

その時は、祭りの山車^{だし}があった。小屋に置かれた山車が大きなガラス越しに見えた。

特に城下町では山車が練り歩く祭りが多くみられる。山車には車輪があり、高さが3m程になるものも珍しくない。その装飾は賑やかで豊かである。

城下町には天守や御殿、櫓^{やぐら}などの城郭建築をはじめ、寺町を形成する寺院の本殿や山門などの寺社建築があった。そうした建造物や工作物の建造には、多種多様な技術と多くの技術者を要した。

技術者とは、建築や建具をつくる大工や建具師、材料を加工する木工や金工の職人、仏像や欄間をつくる彫刻師など、高度な技術を持つ職人たちだ。

山車の製作にはそうした職人たちの技術が応用された。山車は技術と芸術の結晶であり、美術工芸品でもある。

山車を毎年つくり直す祭りもあれば、山車を保管して翌年も利用する祭りもある。保管しても、損傷があれば修理が必要であり、そのためには技術の伝承や職人の確保が求められる。

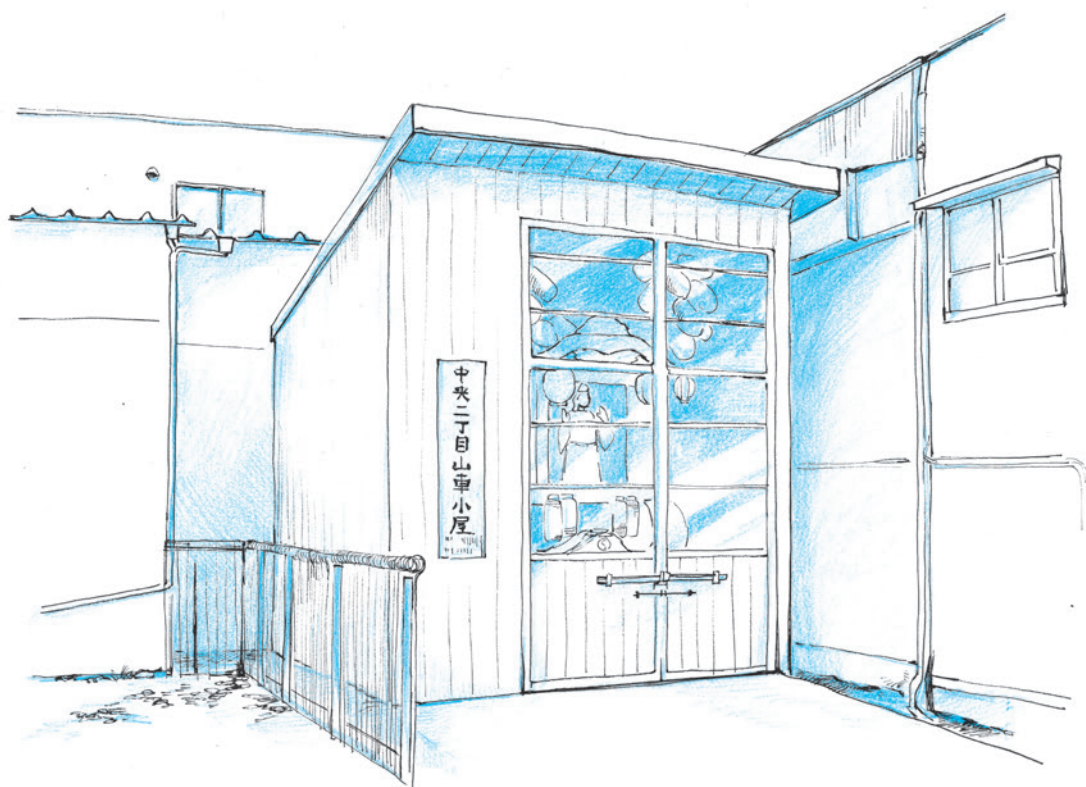
また祭りを持続させるためには、そうした山車の維持はもとより、祭りの担い手や意義の伝承も欠かせない。このようにして山車のある祭りがまちの伝統として受け継がれていく。

大きな山車の保管場所はまちの共有地であることが多い。その小屋に大きなガラス窓があると、日々の生活の中で山車が目に入る。山車を仲立ちにして、祭りを通じた一年間のリズムが刻まれる。

このように大事にされている山車を見ると、その出番を今か今かと待ち焦がれるまちの息づかいを感じる。そして、祭りを通してつながりを大切にするまちの意思を感じることができる。

野中 勝利

筑波大学芸術系教授・芸術専門学群長



挿絵：久田琳佳子（筑波大学芸術専門学群3年）